【実践事例三】

《第三・四学年》
領域「言葉の特徴や使い方に関する事項」
敬体・常体との違いに注意しながら

1　学習材

「ちがいに気付くかな？文末に注意してみよう」
～ミライシード「オクリンク」を活用しながら～

2　ねらい

○　文末の不一致に気付き、目的や相手に応じて文体を統一する意識を高める。

3　学習活動の流れ

一　敬体・常体について知る。
二　文体の不一致を見付け、印を付ける。
三　指定された条件に応じて、文体を統一する。
四　文体が統一された文章を読み、受け手の捉え方を考える。

4　学習活動の実際

一　敬体・常体について知る。

はじめに、「わたしは、アイスクリームが好きです。」と「わたしは、アイスクリームが好きだ。」の文を比べ、普段書いたり読んだりしている文の文末表現には敬体と常体の二種類があることを確認した。

二　文体の不一致を見付け、印を付ける。

ミライシード「オクリンク」を活用し、文体が統一されていない文章を一人一人に送り、その文章を読んで気付いたことを出し合った。すると、「常体と敬体の両方が出てきている。」という意見が出てきた。

そこで、敬体で書かれている文末には赤線を常体で書かれている文末には青線を引かせた。【資料①】この時、自分のシートに印を付け終えたら、ミライシードの「ひろば」にシートを提出した。すると、友達のシートも確認しながら文体が統一されていないことを可視化できた。

三　指定された条件に応じて、文体を統一する。

「一年生に『きつつきの商売』のお話をしょうかいする」という条件を出し、この条件に合うように文末を敬体もしくは常体に揃えさせた。【資料②】打ちかえた後の文末が揃っているか確かめるために、打ちかえた文の文末にも同様に青線もしくは赤線を引かせた。自分のシートで文末を揃えたら、「ひ

きつつきが、お店を開きました。
それはもう、きつつきにぴったりのお店だ。
きつつきは、森の中から、えりすぐりの木を、見つけてきて、かんばんにこしらえた。
かんばんにきざんだお店の名前は、こうです。

【資料①】赤線・青線を引いた

きつつきが、お店を開きました。
それはもう、きつつきにぴったりのお店です。
きつつきは、森の中から、えりすぐりの木を、見つけてきて、かんばんにこしらえました。
かんばんにきざんだお店の名前は、こうです。

【資料②】文末を敬体にそろえた

こまを回して遊ぶことは、昔から世界中で行われてきた。
長い間、広く親しまれるうちに、こまには、さまざまなくふうがつみ重ねられてきた。
そうして、たくさんのこまが生み出されてきた。
日本は、世界でいちばんこまのしゅるいが多い国だといわれている。

【資料③】文末を常体にそろえた

ろば」にもう一度シートを提出させた。すると、クラス全員が敬体に揃えていた。その理由として「一年生には、優しく伝えないといけないから、敬体のほうがいいと思った。」「丁寧に発表するときは、敬体のほうがいいと思ったから。」などがあげられた。そこから、文末が敬体で書かれた文は、丁寧に言いたい時や、優しく言いたい時に使いやすい表現であることを確認した。

次に、「クラスで『こまを楽しむ』という説明文を発表する」という条件を確認し、この条件に合うように文末を敬体もしくは常体に打ちかえた。すると、文末を常体に揃える児童が出始めた。その理由として、「自分の意見をちゃんと聞いほしいので強く言ったほうがいいと思ったから。」「説明文だったから。」などがあげられた。【資料③】

四　文体が統一された文章を読み、受け手の捉え方を考える。

さいごに、文体が統一された文章を読み敬体と常体では受け手の捉え方がどのように違うか考えさせた。すると、敬体で書かれた文は「丁寧なイメージで優しく言える。」「誰が聞いても聞きやすい。」同じ内容の文であっても常体で書かれた文は「強いイメージ」「自分の考えをしっかり伝えるイメージ」といった違いに気付くことができた。

また、文章の書き手がどんな気持ちで相手に伝えたいのか、伝えたい相手は誰なのかによって使い分ける必要があると気付く児童もいた。さらに、文末表現が敬体・常体が混じっていると受け手にうまく伝わらないことにも気付くことができ、文末表現をどちらかに揃える大切さを理解した。

5　取組を終えて

まず、ミライシード「オクリンク」を活用したことで、線を引く場所を間違えても、書き直しが容易にできた。また、友達のシートを自分の画面で確認できるため、友達の考えと自分の考えとを比較しやすかった。そして、なにより文末表現を変えるときに何度も試行でき、スムーズに学習活動を行えた。

次に、文末を揃える時、条件を設定することで伝える相手をイメージしてどちらの文末表現が適しているのかを考え、文体を統一した文章へすることにつながった。このように相手や目的に応じて敬体・常体を使い分けることの大切さを実感する学習になった。

今後も、話したり書いたりする時には文末表現を意識するよう指導を重ねていきたい。